

## ② オーラル・コミュニケーションⅠ、ライティングでのオールイングリッシュによる授業展開のための効果的なALTの活用の研究

### (1) オーラル・コミュニケーションⅠ・ライティングのシラバスを作成のための研究

#### ・研究開発の実施内容

オーラル・コミュニケーションⅠのシラバス（\*資料7）は、スピーチの実施と教科書の理解と発展を中心に作成した。ライティングは、スピーチ、教科書、語彙力の増強を中心に作成した。また、生徒に理解しやすいものを心がけ、評価については、生徒及び保護者にプリントを配布し、理解の徹底を図った。

#### ・研究成果

シラバスが4月当初から生徒に提示されたため、教師と生徒の共通の理解のもとで、授業をスムーズに行うことができた。しかし、オーラル・コミュニケーションⅠとライティングのスピーチのシラバスがほぼ同じであったため、1年次から2年次への発展性がなかったことが大きな課題である。来年度は、スピーチの指導を1年次から2年次にかけてどう発展させていくかを考える必要がある。また、スピーチは年2回行われたが、1回目のスピーチ終了後、スピーチの改善のために有名な演説を聞かせて、スピーチにおける態度の重要性などを指導したが、期待していた効果は上がらなかった。その反省点として、1回目の終了時に生徒の感想をアンケートなどで収集し、生徒側にたった具体的な改善策を考える必要があったと思う。シラバスをより充実させるためには、教師側からの一方的な見方だけではなく、生徒の意見や感想なども参考にして、作成する必要性を感じた。

\*資料7 「Syllabus for Academic Year 2004-2005」

### (2) 英語の教員とALTとの効果的な連携についての研究

#### ・実施内容

一年生のオーラル・コミュニケーションⅠと2年生のライティングにおいて、週一度はそれぞれ一クラスを生徒の習熟度に応じて二分し少人数指導を行っている。一方は外国人講師による単独の、もう一方はALTと日本人教師（JTE）によるティームティーチング（TT）の授業形態である。

#### <効果的な連携のための留意点>

ア 2クラスに分けて同じ進捗で授業を展開していくことや、TTを行うことについては、授業前の外国人講師、ALT、JTEとの綿密な打ち合わせが欠かせない。

イ 授業の事前準備は外国人講師とALTが中心となり、さらにJTEとの話し合いをした上で授業に臨んでいる。また授業終了後には授業の反省、意見交換を行い、その日に行ったスピーチやプロジェクトの評価について話し合っている。

ウ 本校では外国人講師やALTと確実に意思の疎通が図れるよう、英語科の教科会は英語で行っている。英語で意見交換をしたり、連絡事項を確認することにより、外国人講師とALTからは授業改善やSELHIへの取り組みに対して積極的な参加・協力を得ている。

#### ・評価

少人数のクラスになったことでアクティビティを取り入れた授業がスムーズになり、またオールイングリッシュで授業展開することにより、生徒が英語を聞き、話す機会が格段に増えた。その結果、模擬試験におけるリスニングの得点率も過去のデータと比較して向上している。

## ③ 副教材の有効活用による読解力育成に努める研究

#### ・実施内容と課題

##### <速読演習>

学年においては、速読力を高めるために、英語Ⅱの授業の始めの5分～10分を使い、速読演習（英語速読トレーニング Level 2及び3；桐原書店）を行ってきた。生徒の取り組みはかなり真剣であり、授業の始めに200～300語のあまり難易度の高くない英文を読ませることは、ウォーミングアップとしても効果的である。今年度の6月に行った英語コミュニケーション能力テスト（GTEC）においては1分間の速読力は学年平均で76.8語であった。合計54回の速読演習を行ってきたが、後半は英文のレベルが上がってきたため、生徒の取り組みに差が出始めた。生徒の動機付けをいかに高めるかが今後の課題であると思われる。実際にどのくらい速読力が変化したのかは、来年度の英語コミュニケーション能力テストで検証する。

##### <週末課題>

週末の課題として、Weekend Power（School Benesse）を生徒に取り組みさせている。この課題は300～400語